

早稲田大学 グローバルCOE 「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」
調査研究支援スキーム 成果報告

所属 政治学研究科 学年 博士後期課程2年 氏名 井上 浩子

日程 2008年2月6日 ~2008年2月16日

渡航地(国・都市名)

東ティモール民主主義共和国
首都 ディリ市
ボボナロ県 県都 マリアナ市

リサーチ目的

今回の調査は、東ティモールのアイデンティティの形成と変容に関わる包括的な資料を収集することを目的とした。対象となる期間は、インドネシア占領期(1975~1999)及び国連統治期(1999~)である。この両時期において、異なった「他者」との出会いを経験した「東ティモール人」のアイデンティティの変容を研究することを通して、東ティモールから見た国際関係/世界政治を考察するのがその目的である。具体的には、本調査研究旅行では、アイデンティティの形成の重要な軸の一つとして、記憶、特に暴力の記憶の効用に注目した。ティモール社会全体における暴力的現象を扱うと同時に、社会階層、性別、年齢などのティモール社会の分断線に配慮しながら、東ティモールの内部の多様な人々の暴力の経験と記憶、記録などについての情報、資料収集を行った。

研究課題

上述のように、今回の調査研究では、暴力の記述と記憶、それに伴うティモール人のアイデンティティ形成を主たる研究の課題として設定した。東ティモールで起こった暴力は、ティモール人の中でも社会階層、性別、年齢等によって様々に経験され、記憶されてきた。今回のティモール滞在では、この点に配慮しながら、できるだけ多くの異なった人々から聞き取りを行い、かつそれらを代表する形で形成された暴力事件などに関するレポートの収集を行った。特に中心となったのは、インドネシアの占領統治に関する情報及び1999年の住民投票に際しての暴力事件に関する情報であった。

暴力の記憶とアイデンティティ形成に関して

①インドネシア時代の暴力に関する情報の収集

- ・ 武力的抵抗運動と非暴力的抵抗運動とインドネシアの対応
- ・ 個々人の記憶とネーションの記憶
- ・ そこでの集合的暴力の影響力：特に「インドネシア人」による暴力とそれによるアイデンティティ形成

②現在(1999年の住民投票とその後の国連統治期を含む)の社会経済状況に関する情報の収集

- ・ 政治的/非政治的暴力事件に関する情報の収集。
- ・ 特に女性に対する暴力のデータ収集。
- ・ 2006年危機及び2008年2月10日のクーデター未遂事件に関する情報収集。

成 果

●事件のための旅程の変更について●

到着3日目の2008年2月10日朝、大統領と首相がそれぞれ自宅近くで反乱軍に襲われ、反乱軍のリーダーを含む3名が死亡、大統領が重態となる事件が発生した。首相はこれをクーデター未遂事件として、非常事態宣言を発令し、夜間外出禁止命令が出された。これを受けて、私も10日、11日は外出を控え、長めに予定していたボボナロ県マリアナ訪問を1泊2日に変更した。ローカルNGO、Lao Hamtuk など予定していた訪問を一部取りやめるなど、調査の一部を断念せざるを得なくなったことを明記しておく。

●訪れた機関等●

* 国際機関：国連東ティモール統合ミッション (UNMIT: UN Integrated Mission in Timor-Leste) および UNDP 東ティモール事務所。：国内政治・開発状況の包括的情報収集。

* ティモール NGO：Fokupers (女性への暴力に関する情報収集分析の他女性の支援などを行う NGO)、Sahe Institute (識字教育 NGO、隔週新聞の発行)、HAK(人権 NGO)、Peace Center。


* 新聞社：STL 及び Timor Post。：新聞のバックナンバーの収集。

* Sala de Leitura Reading Room：関係資料、文献の収集

* 個人に対する聞き取り：Antero Da Silva 氏(東ティモール大学併設平和センター代表)
Nuno Rodriguez (Sahe Institute 代表)
Celeste Ramos Martins Goncalves 氏 (Fokupers 法律顧問)
Dlidia Da Silva Guterres 氏 (元フレテリン副党首 Mau Hudo 夫人)

インドネシア占領期の国内政治、特にティモール抵抗運動とインドネシア政府・軍との相互作用の過程は、ティモール・ナショナリズムの形成と発展にとって非常に重要なものであった。しかしこれらの資料は、公的な文書として残っている数が少なく、したがって私的な文書の収集と、人々のオーラルヒストリーの記録が非常に重要な位置を占める。そこで本調査では、この穴を埋めるべく、国連その他の機関を回り、報告書、公的統計、新聞、真実和解受容委員会報告書などの情報を集めるとともに、何人の人たちに会い、直接インタビューを行った。中でも、今回の東ティモール訪問で最も意義深かったことの一つは、Dlidia Da Silva Guterres 氏にお会いし、インタビューを行うことができたことである。1975年以降、ティモール・ナショナリズムの中核を担ってきたフレテリン(東ティモール民族解放戦線)の元副党首故 Mau Hudo の未亡人に話を聞くことで、1980年代のフレテリンの武装闘争から1990年代の非暴力闘争への以降とそれによるティモール・ナショナリズムの変容についての理解を深めることが可能になったからである。本調査では第一回目のインタビューとなったが、今後長期的、継続的に Da Silva Guterres 氏の話記録していくことを予定している。これはまた、一人のティモール人女性の抵抗運動と独立の記憶について知ることになることであるとも考えている。

事業推進担当者確認 (署名・押印)

メイン	藤原 初枝	
サブ	勝間 靖	

* A 42 枚以内。各項目のスペースはご自由に変更下さい。